

《二》 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

「雑草は踏まれても」こんな言葉をよく聞きます。「雑草は踏まれても」この空欄には、どんな言葉が入るでしょう。もしかすると、あなたは、「立ち上がる」という言葉を思いついたかもしれません。「踏まれても踏まれても立ち上がる」それが、雑草のイメージですね。しかし、それは間違いです。じつは、雑草は踏まれると立ち上がらないのです。「雑草は踏まれても立ち上がらない」これが、^A 本当の雑草魂です。確かに一度踏んだくらいなら、立ち上がってくるかもしれません。しかし、何度も踏まれると雑草は立ち上がることはないのです。何だか、情けないと思うかもしれませんが、「せつかく雑草のように頑張ろうと思っていたのに」とがっかりしてしまった人もいるかもしれません。しかし、そうではありません。じつは、踏まれたら立ち上がらないことこそが、雑草のすごいところなのです。

雑草は踏まれたら、立ち上がりません。どうして、立ち上がろうとしないのでしょうか。考え方を少し変えてみることにしましょう。そもそも、どうして踏まれたら立ち上がらなければならないのでしょうか。植物にとって、もつとも大切なことは何でしょうか？それは花を咲かせて、種を残すことです。そうだとすれば、踏まれても踏まれても立ち上がろうとするのは、かなり無駄なエネルギーを使っていることになります。そんな余計なことにエネルギーを割くよりも、踏まれながらも花を咲かせることのほうが大切です。踏まれながらも種を残すことにエネルギーを注がなければなりません。だから雑草は、踏まれても踏まれても立ち上がるような無駄なこととはしないのです。踏まれる場所で生きて行く上で、一番大切なことは、立ち上がることでありません。踏まれたら立ち上がらなければならないというのは、人間の勝手な思い込みなのです。もちろん、踏まれればなしという訳ではありません。踏まれて、上に伸びる事ができなくても、雑草は決してあきらめることはありません。横に伸びたり、茎を短くしたり、地面の下を根を伸ばしたり、なんとかして花を咲かせようとします。もはや、やみくもに立ち上がることなどどうでも良いかのようです。雑草は花を咲かせて、種を残すという大切なことを忘れはしません。大切なことをあきらめることもありません。だからこそ、どんなに踏まれても、必ず花を咲かせて、種を残すのです。「踏まれても踏まれても大切なことを見失わない」これこそが、本当の雑草魂なのです。

植物の成長を測る方法に「草高」と「草丈」があります。この二つの言葉は、よく似ていますが、意味するところは違います。草高は「根元からの植物の高さ」を言います。一方、草丈は「根元からの植物の長さ」を言います。何だ、同じじゃないかと思うかもしれませんが、そうではありません。確かに上に伸びる植物にとっては、草高と草丈は同じです。しかし、踏まれながら横に伸びている雑草はどうでしょうか。横に伸びてゆくの、草丈は大きくなっても、上に伸びることはないので、草高はゼロのままです。アサガオが二階まで伸びましたと喜んでみたり、もうこんなに伸びたからそろそろ草刈ろうかと言ってみたり、人間は、植物の成長を「高さ」で測りたがりです。それが一番、簡単な方法だからです。しかし、まっすぐ上に伸びる事だけが成長ではありません。身の周りの雑草を見てみてください。みんな曲がったり、傾いたりしながら成長しています。まっすぐに伸びている雑草は一つもないのです。

横に伸びたり、斜めに伸びたり、何度も曲がったり、雑草の伸び方はそれぞれです。そんな複雑な成長を測る事は大変です。そのため人間は植物を「高さ」で評価します。人間の持っているものさしは、まっすぐなものさしです。そのため、まっすぐな高さで測ることしかできないのです。「高さで評価される」ということは、皆さんにとっては成績や偏差値という言葉が当てはまるかもしれない。「高さ」という尺度は大切な尺度です。「高さ」で測ることはダメなことではありません。成績は悪いより良いほうがいいに決まっていますし、成績が良い人はほめられるべきです。しかし、それだけのことです。それはたった一本のものさしで測ったたった一つの尺度に過ぎません。大切なことは、高さで測れることは、成長を測るたった一つの尺度でしかないこと知ることです。雑草の成長がそうであるように、「何が大切な？」を考えれば、「高さ」がすべてではありません。まっすぐなものさしで、すべての成長を測ることはできません。そしておそらく、本当に大切なことは、ものさしでは測ることのできないものなのです。

人々が行きかう歩道の隙間に、雑草が生えているのを見かけます。あるものは茎を横に伸ばしていたり、あるものは大きくなることなく、身を縮ませています。そんな雑草を見て、何だかわいそうと思うかもしれません。地べたで暮らす雑草たちを惨めに思ってしまうかもしれません。しかし、本当にそうでしょうか。確かに他の植物たちが、天に向かって高々と伸びようとしているのと比べると、踏まれている雑草は成長していないように見えます。他の植物が高く高くと縦に伸びているのに、踏まれる場所の雑草は本当に縦に伸びることをあきらめてしまっているのでしょうか。植物が上に向かって伸びようとするのには、理由があります。先にも説明しましたが、植物が成長するためには、光を浴びて光合成をしなければなりません。光を浴びるためには、他の植物よりも高い位置に葉をつけないけません。もし、他の植物よりも低ければ、他の植物の陰で光合成をしなければなりません。有利に光合成をするためには、他の植物よりも少しでも高く伸びなければなりません。光を求める植物たちにとって、自分がどれだけ伸びたのかという ^B 的な高さは、じつは重要ではありません。光を浴びるために大切なのは、他の植物よりも、少しでも高く伸びるという ^C 的な高さです。そして、他の植物よりも少しでも上に葉を広げようと上へ上へと伸びるのです。植物たちはこうして激しい競争を繰り広げています。踏まれる場所の雑草は、本当にこの競争に参加しなくても大丈夫なのでしょうか。もちろん、大丈夫です。よく踏まれる場所には、上へ上へと伸びようとする植物は生えることができます。上へ伸びても踏まれて折れてしまうからです。そのため、草高がゼロの横に伸びる雑草も、小さな小さな雑草も、広げた葉っぱいっぱい太陽の光を存分に浴びています。こんなに光を独占している植物は、他の場所ではなかなか見られません。

(稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる 生き物をめぐる個性の秘密』より)

(出題に際し、原文の改行を小見出しごとに詰めています。)

問一 傍線部A「本当の雑草魂」とありますが、筆者は雑草のどのようなあり方に「本当の雑草魂」を見出していますか。次のことから最も適切なものを選び、符号を書きなさい。

- イ 名のある草花に負けないようにと、同じ環境でも競り勝とうとするあり方。
ロ 人に踏まれる経験を経験として、花を美しく咲かせることを優先するあり方。
ハ 踏まれれば踏まれるほどに、へこたれないで復元していかうとするあり方。
ニ 劣悪な環境になじんでいつて、光を浴びなくても生き抜こうとするあり方。
ホ 踏まれることは受け入れた上で、種子を残していくことに力を注ぐあり方。
ヘ 派手な成長は避けることで、出来るだけ踏まれないようにしていくあり方。

問二 空欄BとCには対になる言葉が入ります。適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、符号を書きなさい。

- イ 無機 ロ 利他 ハ 相対 ニ 現実 ホ 利己 ヘ 空想 ト 絶対 チ 有機

問三 傍線部D「踏まれる場所の雑草は、本当にこの競争に参加しなくても大丈夫なのでしょう。もちろん、大丈夫です」とありますが、なぜ「踏まれる場所の雑草」は「大丈夫」だといえるのですか。五十文字以内で説明しなさい。

問四 二重傍線部「『踏まれても踏まれても立ち上がる』それが、雑草のイメージですね」とありますが、なぜ人間はそのようなイメージを抱いてしまうのですか。六十文字以内で説明しなさい。

問五 筆者は本文のしばらく後で次のように述べています。そこに波線部「そんなことを教えられます」とありますが、雑草に「教えられ」ることとはどのようなことですか。本文の内容に即して百字以内で説明しなさい。

踏まれた雑草は立ち上がりません。踏まれた雑草は上にも伸びません。そもそも、立ち上がらなければならないのでしょうか。そもそも、上に伸びなければならぬのでしょうか。踏まれて生きる雑草を見ると、そんなことを教えられます。

〈三十五点〉

《二》次のI・IIの問いに答えなさい。

I 次の①～⑮の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 新しい技法をタイトクする。
- ② 目標達成はシナンの業だ。
- ③ 忠臣たちが没落した主家のサイコウを図った。
- ④ カダンな行動により危機を脱した。
- ⑤ 国の指導者としてのキリヨウに乏しい。
- ⑥ セキヒン洗うがごとし。
- ⑦ グローバリズムは、文化のキンシツ化を招く側面がある。
- ⑧ セイトウ派ラブロマンスからB級ホラーまで様々な映画を見る。
- ⑨ 古い友人が訪ねて来たので、オウセツ間に通した。
- ⑩ 大河ドラマの時代コウショウを受け持つ。
- ⑪ 最近のニュースは同じ話題ばかりで、いささかショクショウ気味だ。
- ⑫ 論者の主張にキョウメイする。
- ⑬ 審判にイを唱えた監督が退場になった。
- ⑭ 政策にギギをはさむ。
- ⑮ 神よ、どうかこの惨劇をショウランあれ。

Ⅱ 次の⑬～⑳の空欄に、例にならって漢字を一字補うことで文意が通るようにしなさい。それぞれの空欄に入る字は後の語群のカタカナを漢字に改めて答えること。

例 □ 々しいお世辞を言うな。↓ 空々

- ⑬ 会合には各界のお□々が集まっていた。
⑭ 二度あることは□々にして三度あるものだ。
⑮ 朝から□々と続く雪かきに苦しんでいる。
⑯ 昔の失敗を思い出すと、心が□々に乱れてしまう。
⑰ 感染が拡大しており、□々しき事態だ。

《語群》 ソラ ドク コク エン ヒ チ レキ メ ユ ミヤク ドウ オウ フシ

〈二十点〉

《三》 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

新は、ブラインドマラソン(視覚に障がいのある人が参加するマラソン)を始めてまもない兄の朔の伴走者をつとめている。一年前、朔と新が乗る予定だったバスの便を新の都合で変更したが、そのバスが事故を起こし朔は視力を失った。中学時代、長距離走者として注目を浴びていた新だったが、兄が視力を失ったことに責任を感じ、事故以降、選手として走ることをやめてしまっていた。

「まあいいや、で、メールどう思った？」

新は唇を噛んだ。

まだ見ていなかった。というより見られなかった。

数時間前 ① 境野に代わりの伴走者を見つけてほしいと頼んだときは本気だった。それはうそではない。自分は伴走者に向いていないし、これから続ける自信もなかった。代わりを探してくれと頼んだのも、それを望んだのも新自身だ。なのに、いざとなると胸がざわついた。

新はベッドの上に腰かけて、静かに息をついた。

「朔のしたいようにするのがいいと思う」

「マジで？」

新は頷いた。

「境野さんもいいと思ったから朔に勧めてくれたんだろうし」

「そりやそうだろ。オレにちようにどいって思っただんじやないかな」

① ちようにどいって、なにがだよ――。

じりつと首元から流れた汗を、新は手の甲で拭った。

「だったら、オレに相談する必要とかないと思うけど」

「なんで？」

「決めるのは朔だろ！ オレには関係ないし」

思わず新が声を荒らげると、朔は顔をしかめた。

「関係ないってことは」

「……ないよ」

朔はため息をついた。

「新がそんなんじや、大会なんて出らんないだろ」

「そんなことオレには……大会？」

「十二月の。おまえ、なんの話だと思ってたの？ つーかメール読んだんだよな」

「……………」

「読んでないのかよ！」

朔はちつと舌打ちして、早く読めとばかりにあげをあげた。

〈境野です。十二月に神宮外苑チャレンジフェスティバルという大会があります。この大会は障がいがあるランナーも一般ランナーも一緒に参加できます。距離は十キロと五キロ。十キロの制限時間は八十分。君たちなら問題なく十キロで参加できるはずです。神宮球場からスタートして神宮外苑を周回するというコースです。出てみませんか?〉

大会の概要と参加を誘うひと言が書いてあるだけのあつさりとした内容だった。

「どう思う?」

読み終わったタイミングで朔に問われて、新はどきりとした。

「どうって、十キロならもう余裕だよ」

「うん。そこはオレも心配してない。完走はできる。でもどうせやるなら入賞を目指したい」

真つすぐに言い切る朔を見つめて、^②新はふつと笑った。おかしいとか嬉しいというのではない。もちろんバカにしているわけでも呆れているわけでもない。ただ笑ってしまった。

やっぱり朔は朔だ。

「いいんじゃないの。可能性はあるよ」

新が言うと、朔は安堵したように表情を緩めた。

「でも、それならやっぱり伴走者は代えたほうがいい」

朔がぴくりと動き、それから頭をかいた。

「なんか、うーん、そんなこと言い出すような気がしてた」

驚いて新が視線をあげると、朔は唇をこすった。

「今日転んだこと、気にしてるんだろ」

新はすつと視線を床に落とした。

「おまえてってわかりやすいっていうか、マジで単純だよな」

「人をバカみたいに言うなよ」

ぼそりと新がつぶやくと、朔は目元にかかった髪に息を吹きかけた。

「オレさ、ブラインドマラソンを始めたとき、オレと新はチームなんだって思った。ほら、伴走者ってガイドともいうけど、パートナーともいうだろ、そっちの感覚。でも実際走っていると、やっぱりオレは新に支えられているだけで、パートナーっていう関係にはなれていないんだってずっと思ってた」

「ダメなの?」

「ダメじゃない。ガイドっていう考えかたが間違ってるとも思っていない。ただ、オレはそれじゃあおもしろくないなって」

「……………」

「今日さ、転ぶ直前、あれってあきらかにオレのペースじゃなかっただろ。焦ったし、無理だって思ったし、まあ実際ついていけなくて転んだんだけど。でも、怖いかさそういうんじゃないかった。なんていうか、高揚したっていうか。一瞬だけど、知らない世界に足突っ込んだっていうか」

新は がぶりを振った。

「ランナーのペースに合わせるのが伴走者の仕事で、その逆はない」

「それはわかってる。新の言ってることは正しいよ。伴走者はランナーを導いていくガイドだ」

そう、伴走者はガイドだ――。

新は膝の上でぎゅつとこぶしを握った。ランナーの目になり、的確な指示を出して安全に確実にゴールまで導いていく。伴走者が走るのはランナーのためだ。自分のためじゃない。

オレには、伴走者として朔の隣で走る覚悟も自信も、資格もない――。

「あのさ、転んだの今日が初めてだからな。毎日走っているのに、一度もなかったんだぞ。新がいつも神経張って伴走してくれてることとは、オレが一番わかってるつもりだけど」

「でもケガさせた」

朔は大きく息をつくと、「ちょっと待ってろ」と部屋を出ていき、筒状になっている画用紙を持って戻ってきた。

「見てみな」

戸惑いながら新はそれを受け取ると、ゴムを外して画用紙を開いた。

画面に大きく、笑顔の男の子の顔が描いてある。世辞にもうまいとはいえない。けれどよく見ると、絵に沿って小さな盛り上がった点がついていることに気がついた。

「その絵、点を指でなぞるとオレにもちゃんと見える」

「これって」

「あのバスに乗ってた女の子がくれた」

「……………」

朔と事故のことについて話すのは初めてだった。

「その女の子、バスの中でも絵を描いていたんだろうな。で、クレヨンを落としちゃったんだ。水色のクレヨン。それがオレの席のそばに転がってきて、手を伸ばしたんだけど拾えなくて。で、シートベルトを外して通路に出たとき、事故が起きた。あとのことは覚えてないけど、たぶん吹っ飛んで、頭を打ったんだと思う」

あの事故で大きなケガや亡くなった人は、シートベルトをしていなかったと聞いた覚えがある。けれど朔はシートベルトをしていなかった理由を言わなかったし、両親も朔を問うようなことはしなかった。

「ダイミングが悪かったんだよ」

机のイスを引いて、朔は腰かけた。

「もちろんオレがこうなったのは、その子のせいなんかじゃない。オレが勝手に拾おうとしただけで、頼まれたわけでもない。でも、めぐちゃん、あ、その女の子の名前だけど。めぐちゃんは事故のショックでしゃべれなくなっちゃって。四ヵ月たって声が出るようになって。それでお母さんにオレのことを話したんだって」

朔は淡々と話を続けた。

「めぐちゃんのお母さんたち、いろいろ調べたんだろうな。オレのこと知って、去年の夏頃かな、うちに手紙くれたらしくて。要は、オレに会いたいってことだったんだけどさ。母さんは反対したらしいけど、父さんがオレのいるところを教えたんだって。で、そのときオレが 厄介になつてた寺に来てくれて、めぐちゃんから、それもらった。めぐちゃん、お母さんと一緒に点字で書いてくれたんだよ。でもオレさ、そのとき点字なんてまったくわからなくて」

そう言っふと笑った。

③「すげー恥ずかしかったよ。めぐちゃんは一年生になったばかりでさ。そんな小さい子が一生懸命書いてオレんところに来てくれたのに、オレはなにやっつてんだろうなって。きつと、来るまで怖かったと思うんだ。お母さんにしてもめぐちゃんをオレに会わせること、悩んだと思う。うん、絶対悩んで、迷ったと思う。でも来てくれて」

朔は膝に肘を当て、手のひらを組んだ。

「あの頃、オレぜんぜんダメで、盲学校に行ったのだった。ただ逃げただけだと思う。みっともないだろう」
ううん、と新は唇を噛んでかぶりを振った。

「めぐちゃんからもらった画用紙にも、なにが書いてあるのかわからなくて。でもそれをめぐちゃんに聞くこともできなくて。そりやそうだろ、めぐちゃんはお母さんと勉強して、点字打ってくれたんだよ。それをオレが読めないって。で、自分で読めるようになるうと思つて勉強始めたんだ。事故にあつてから初めてオレ、自分でなにかしようって思つた」

新はじつと画用紙を見た。

朔らしき男の子の顔の上に、横書きで たどたどしいひらがなが書いてある。

——おにいちやんえ

もういたくないですか

おにいちやんがいっぱい

みえるようになりますように

その文字の上にも、盛り上がった小さな点、点字記号が並んでいる。

「この先、もしもどこかでめぐちゃんに会ったら、ちゃんと笑っていたい。笑って、顔をあげて、たくさん見えるものがあるよって、言えるようになっていたい」

「……それと走ることと、どう関係あるの」

朔はふつと息をついた。

「見たいんだよ、オレは。世の中にあるもの、なんだって見たい」

「……………」

「できなかったことができるようになることも、わからないことがわかるようになることも、知らない世界を知ること、全部、オレにとつては見ることなんだ」

ぐうぐうと、扇風機の微かな風音が朔の声に混じる。

「見るって、目に映るものだけじゃないんだよ」

朔は柔らかに目を細めた。

「オレにとつて、走るってそういうこと。新はオレにいろんなものを見せてくれる」

注1 境野……朔の通っていた盲学校の陸上部コーチ。

注2 厄介になつてた寺……盲学校が休みの時、家に帰りたくなかった朔は、寺にお世話になつていた。

問一 波線部 a c の意味を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、符号を書きなさい。

a 「かぶりを振った」

イ うなずいた

ロ とまどった

ハ 否定した

ニ 不思議に思った

ホ 驚いた

b 「たどたどしい」

イ くせが強い

ロ ぎこちない

ハ かわいらしい

ニ 間違っている

ホ 整っている

c 「目を細めた」

イ 眉根を寄せた

ロ じつと見つめた

ハ 反論した

ニ 理解を示した

ホ 笑みを浮かべた

問二 傍線部①「ちようどいい」とありますが、

(1) 朔は、何を「ちようどいい」と言っているのですか。十五字以内で答えなさい。

(2) 新は、朔が何を「ちようどいい」と言っていると思ったのですか。十五字以内で答えなさい。

問三 傍線部②「新はふつと笑った」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、符号を書きなさい。

イ 伴走者としての自信を失っていた新だったが、彼を肯定的に受け入れてくれる朔の発言に、伴走者としての自信を取り戻したから。

ロ 初めてブラインドマラソンの大会に参加するのに、なぜか自信満々に入賞を目指したいと言う朔の言動を、滑稽なものに感じたから。

ハ 一年前に視力を失うという事故に遭い、生きる気力を失っていた朔が前向きな発言をしていることに、喜ばしい思いを抱いたから。

ニ ケガをした直後なのに、それを気にすることなく高みを目指そうとする朔の言葉が、いかにも朔が発言しそうなものだったから。

ホ 朔がレース参加に前向きであることが分かり、しばらく出場していなかったレースに、久しぶりに参加できるといふ実感が湧いてきたから。

問四 傍線部③「すげー恥ずかしかったよ」とありますが、朔がこのように感じたのはなぜですか。百三十字以内で説明しなさい。

問五 二重傍線部「自分は伴走者に向いていない」とありますが、新がこのように考えるのはなぜですか。八十字以内で説明しなさい。

問六 朔は自分の伴走者についてどのように考えていますか。本文全体の内容をふまえて九十字以内で説明しなさい。

